

# 英語学習における主体的・対話的で深い学びに関する研究 —協働的な言語活動を活性化する教師の発問の工夫に着目して—

教育実践力高度化コース 20AD002

内田 陽

【指導教員】 庄司 康生 及川 賢 大沢 裕

【キーワード】 英語教育 発問 問いの創造 自己内対話

## 1. はじめに

2021年(令和3年度)4月より、新しい中学校学習指導要領が全面実施となる。各教科等の目標及び内容が、育成を目指す資質・能力の三つの柱(「知識及び技能」、「思考力、判断力、表現力等」、「学びに向かう力、人間性等」)に沿って整理され、どのような資質・能力の育成を目指すのかが明確化された。

外国語の目標では、「外国語によるコミュニケーションにおける見方・考え方」が加わり、外国語教育の特質に応じて、生徒が物事を捉え、思考を働かせることが重要であると示された。どのような視点で物事を捉え、どのような考え方で思考を深めていくのかという、目的や場面、状況等に応じて行うコミュニケーションが今後の英語教育に求められている。

今までの実践として、本校では平成25年度より、文部科学省の「英語によるコミュニケーション能力・論理的思考力を強化する指導改善の取組事業」の委託指定を受け、「繰り返し」による指導の工夫に焦点を当てながら、その指導法の研究を進めてきた。実践により、生徒たちが英語に触れる時間が多く確保され、「伝えたい」という積極的な意欲が表れた。また、仲間とともに協力しながら言語活動を行う姿勢も見られ、安心して表現できる環境が作られた。仲間同士で気軽に尋ねあい、安心して間違いや失敗ができる人間関係形成が重要であることを学んだ。一方で、与えられた教科書の内容は伝えられるが、自ら問いを創造したり、課題を見つけ自分の意見や考えたこと、言いたいことを持ったりする生徒は少ない傾向にあった。このことから、題材や生徒の経験を結びつけ、自ら伝えたいと思う力の育成が求められる。

## 2. 研究の目的

本研究では、人と人とのつながりを大切にした「協働的な言語活動」や子どもたち自身が自らのうちに問いを持つような「発問や問いの創造」を通して、子どもの深い学びを促す授業改善の手立てを探っていくことを目的とする。

研究の主な対象として英語の教科を中心に、生徒の興味の喚起、生徒同士の対話による関係形成、生徒の自発的な問いの創造などの視点を意識した指導を展開することで、教師の授業力の向上や子どもたちの深い学びの保障を目指す。

## 3. 子どもたちの深い学びを促すために

学習指導要領では、「深い学び」の鍵として「見方・考え方」を働かせることが重要になると述べている。各教科等の

「見方・考え方」は、「どのような視点で物事を捉え、どのような考え方で思考していくのか」というその教科等ならではの視点で物事を捉える考え方である。各教科を学ぶ本質的な意義の中核をなすものであり、教科等の学習と社会をつなぐものであることから、児童生徒の学習や人生において「見方・考え方」を自在に働かせるようにすることにこそ、教師の専門性が発揮されることが求められる。

### (1) 認識と関係性の固定化

子どもたちの「見方・考え方」を働かせるためには、子どもたち自身が心を開き、創造的に物事について思考する必要があるが、一方で、以下の二つの固定化が自由な発想を阻害してしまう可能性がある(安齋, 2020)。

一つ目は、認識の固定化である。これは、当事者に暗黙のうちに形成された認識(前提となっているものの見方や固定観念)によって、物事の深い理解や、創造的な発想が阻害されてしまう状態である。

二つ目は、関係性の固定化である。当事者同士の認識に断絶があるまま関係性が形成されてしまい、相互理解や、創造的なコミュニケーションが阻害されている状態である。互いの認識や前提に「ズレ」があったまま関係性が固定されてしまうと、その溝を乗り越えることは、さらに容易なことではなくなる。「あの人とは分かり合えない」という状況は、お互いの認識に齟齬があるまま、そのズレ方が固定されてしまったために起こる状況なのである。

このような固定化は、中学校現場においても頻繁に見られることである。自分の居場所を形成することも重要なことであるが、多様な認識に触れることにより、子どもたちが自ら考え、課題を見つけ解決に向かうことも重要である。そこには、生徒が学習に対する意欲を持ち、主体的に学習していく環境をつくらなければならない。教師が子どもたちへどのような授業のアプローチをするかが問われる。

### (2) 教師の役割

授業において、教師は様々な役割を果たしながら子どもたちの学びの支援を行なっているが、いずれは教師がいなくとも自ら問いを創造したり、課題を見つけ解決したりできるように育ててほしいという願いがある。そのような力は、1回の授業で身につくようなものではない。自ら問うことができるように、時間をかけて子どもたちを育てていくという教師の粘り強い姿勢と授業づくりが求められる。具体的には、教材研究を重ね、ねらいに応じて子どもたちに何

を考えさせたいのかを明確にすること、目的や場面、状況に応じた適切な問いが立てられるような手立てを準備することなどが考えられる。授業の中では、教師から子どもたちに問うばかりではなく、子どもたちが自ら問う場面を多く設定することも重要である。しかし、ただ何でも問えばよいというのではなく、その教科や単元などのねらいに即したものでなければならない。さらに、子どもたちの自ら問う力を育成するためには、教師自らがその模範を示すことが求められる。何もない状況から子どもたちが自ら問いを生み出すことは容易ではない。教師の模範を参考にし、徐々に子どもたちが問いを生み出せるように育てていく。そのためには、どのような問い方が、効果的に子どもたちの力を育てるのかを明らかにする必要がある。

#### **4. 発問に対する捉え方**

##### (1) 文部科学省の定義による発問

文部科学省 (CLARINET) では、「質問」と「発問」について簡単な定義が次のように述べられている。「質問」は子どもが本文をみればわかるもの、「発問」は子どもの思考・認識過程を経るものと定義している。「質問」は、一問一答のように答えが明確であり、子どもの思考力をよりどころとしないものであると考えられる。一方、「発問」は、子どもの思考する段階を経ることにより答えの幅が広く、深いものとなる。

発問の要件として、①何を問うているのかがはっきりしていること、②簡潔に問うこと、③平易な言葉で問うこと、④主要な発問は、準備段階で「決定稿」にしておくことを挙げている。さらに、広義には子どもたちの学習に変化をもたらす緊張を誘うものであること、狭義には子どもたちの思考や認識に疑念を呈したり混乱を引き起こしたりすることによってより確かな見方へと導くものであると述べている。

学級の状況や指導場面によっては、「質問」による確認が必要となることもある。しかし、「はい、いいえ」ばかりでは淡白な授業となり子どもたちの思考力は養われないう。 「発問」をすることにより、より具体的な内容が求められ、自分の考えや相手の考えを伝え合うことにより、深い学びにつながる。例えるならば、バレーボールのように何度かパスをつなぎ、相手に返すような流れである。

以上から、文部科学省で述べられている「発問」は、どう問うかという手段やどう子どもたちに影響するかという機能面を重視していることがわかる。

##### (2) 子どもの探求がはじまる発問

佐伯 (2003) は、答えを言わせる発問ではなく、教師の発問が刺激となって子どもの探求がはじまる発問こそが真の発問であると述べており、そのような触発的な発問はいかなる時にいかなる形でなされるかについて、8種類の発問を示している。特に、7つ目に示している、「ほんとうにそうか?」と問う発問は、子どもたちが何気なく当たり前と思っていることについて、あえて意識させ、問い直させるものである。この発問は、答えを求めるのではなく、自ら課題を

見つけ問うことを求めている。子どもたちが持っている認識について、疑問を持つことが重要であると考えられる。

子どもたちは、当初は「導かれて」思考するであろうが、しだいに自ら問いを発して、自ら答えをさがしていくという自立的な探求活動がはじまらねばならない。佐伯は、これまでの教育において、答える力のみが学力として取り上げられてきたことに対して、問う力をつけることが、本当の学力であると述べている。答えることではなく、問うことを教える教育を根本にすえて、授業中の発問の役割をもう一度洗い直してみる必要があると提言している。

##### (3) 栃木県さくら市喜連川中学校の実践

第3学年にて実施された。授業の目標は、「戦争や平和について理解し、考えを伝えることができる」とし、「It is ~ for ~ to...」の表現の導入が設定された。

教科書の題材に自己関連性を持たせ、生徒の発話から広島原子爆弾の話題へと導くために、オーセンティックな素材として、日常生活で生徒たちが多くの時間を費やしているモバイルゲームを提示した。次に、原子爆弾の広島投下時のきのこ雲の写真と、ゲーム上での爆弾投下の画面を同時に映し、「What is the same? What is different?」と問いかけ、2分程度ペアで比較し、共通点と相違点について考えさせた。その後、平和の維持のためには **It is important for us to learn history.** と、本時の表現を導入しつつ、歴史を学ぶことは大切だということを確認し、グループ活動で紛争の原因は何であるか、カードを使って考える活動を行った。最終的に、教師からの “How can we stop the war? What can we do? What's important?” という問いに対し、“It is important for us to solve our problems by talking not fighting.” “It is important for us to respect others.” “It is important for us to study about world.” “It is important for us to make rules for peace.” といった様々な提案が生徒たちから出された。

#### **5. 英語の授業における発問を中心とした授業づくり**

##### (1) 授業における発問の教育的な役割

子どもたちを深い学びへ導くためには、教師が効果的に発問を行う必要がある。そして、しだいに子どもたち自身が問いを創造出来るよう促すものでなければならない。以下に、発問が持つ教育的な役割を挙げる (田中, 2009)。これらの役割を意識しながら授業を行うことで、子どもたちの自ら問う力の育成につながると期待できる。

##### ①教材との主体的な関わりを持たせる

生徒の教材に対する捉え方は、様々である。教師が発問することによって、「どうのことだろうか?」と教材の世界に導くのである。教材の本質を生徒に気づかせるように工夫することで、主体的に授業へ参加するようになる。

##### ②授業内で協同的な学びを作り出す

1つの発問がクラスの中のコミュニケーションを作り出す。例えば、“What is something white in the picture?” という問いに対し、様々な意見が出される。他の生徒がどのように考えたかを共有することで、クラス全員の理解が深ま

り、何度も教材に向き合うことになる。

### ③教師と生徒とのコミュニケーションを作り出す

教師の英語による発問をきっかけに、生徒が英語で答える場面が創り出される。生徒の些細なつぶやきも拾うことで普段は発言が少ない生徒が授業に貢献することもある。

### ④教材が扱う多様なトピックについて生徒に考えさせる

生徒の経験は狭く、日頃考える内容も限られている。しかし、題材を通して、普段は考えることのないような社会的問題などを身近なものとして考えるきっかけを作り出す。

### ⑤自分自身の考え・意見・感情に気づかせる

問いに対する答えを探す過程の中で、生徒は「自分はどのように感じ、どう考えるか。」と自分自身のことを考えるようになる。自分の問題として考え始めることができる。

#### (2) 効果的な発問の3つの条件

胡子 (2020) は、以下のような発問を効果的に扱う授業を展開することが重要だと述べている。

#### ①明確で具体的なこと

5W1H の要素を含んだ具体的で明確な発問を心がける。生徒の体験を取り入れてより身近に捉える発問である。

#### ②生徒の気づきがあること

例：What can we do to make things better to share happiness?

生徒の新たな発見につながる発問である。教師が話すべきでないよう、生徒の思考の必要性を高める工夫を行う。

#### ③仲間と協力してジャンプできること

例：What will Takeshi do after this? Imagine, what would you do for children in hunger?

一人では少し高く感じるが、仲間となら超えられるレベルの発問である。登場人物のその後の行動を考えさせ、生徒の考えを引き出すものである。

## 6. 協働的な学びについて

中央教育審議会答申 (平成 24 年, 8 月) 「新たな未来を築くための大学教育の質的転換に向けて」では、アクティブラーニングについて、教員による一方的な講義形式の教育とは異なり、学習者が能動的に学修することによって、認知的、倫理的、社会的能力、教養、知識、経験を含めた汎用的能力を育むことと定義された。また、江利川 (2012) は協同学習について、少人数集団で自分と仲間の学びを最大限に高め合い、全員の学力と人間関係力を育て合う教育の原理と方法であると定義している。

#### (1) 自己内対話と他者との対話の往還

英語は言語である。伝える側がいれば、受け取る側がいる。お互いに相手の言葉を受け取りながら、自分の考えを膨らませていくことで、深いつながりを築いていく。相手の言葉を受け取るためには、その受け取り方が重要である。今までの聴く指導というものは、話を静かに聴くための手段の指導を行っていた。古屋 (2018) は、話の内容を自分の言葉で説明することができ、話を聴いた後にその話について自分の感想や考え、疑問を持ち、それを言葉にすることこそが聴くことであると述べている。つまり、聴きながら、納得、

共感、反発、疑問などの過程を通して、自分の新たな考え方を再組織化していくのである。そうして創り上げたものを共有することで、課題の探求に全員が参加し、相互理解の葛藤を乗り越えながら、学びを深めていくのである。

<実践事例 秋田大学教育文化学部附属小学校>

#### ①実践の基本構想

研究の重点に、「課題」、「協働の学び」、「主体性」の関係を置いている。これらを有効な関わりにするために、「対話」の活用を実践している。

#### ②具体的な授業の手立て

##### (ア) 「対話」を生む価値ある課題設定

対話の必然性や必要感を子ども自身が感じられる課題の設定をする。多様な知的葛藤が生じるよう仕向ける。

##### (イ) 「他者との対話」と「自己内対話」の意図的な活用

個々の子どもたちの持っている個性や資質・能力を生かし、それらを授業で発揮できるようにすることが大切である。「問い」を共有し、その探究に全員が参加すること、多様な対話形式を活用する。

##### (ウ) 対話の向上のための個々の子どもへの対応

活発に話す子どもや沈黙している子どものように、1 人の子の強い主張のみが支配する対話にならないようすべての子どもが主体的に参加できる対話の工夫をする。

#### (2) グローバル化社会における新たな学び

グローバル化が急速に進展する中で、外国語におけるコミュニケーション能力は、これまでのように一部の業種や職種だけではなく、生涯にわたる様々な場面で必要となることが想定される。子どもたちの学ぶ場は、オンライン上でも展開されるようになり様々な国と交流を持つ授業が全国で実践され始めている。多様な文化的背景を持った人々と容易に関われる社会が現実化している。価値観や文化が異なれば、そこに対立や摩擦が起こることが考えられる。しかし、異なる考えや認識との出会いは、創造することへのきっかけを与えてくれる。その出会いを固定化させず、新しい希望へ導くことこそが我々教師の役目であると考え。

## 7. 子どもたちの「問う」力の育成を目指して

今までのように、教科書 (のみ) を教える授業は、正解を効率よく求めるための活動が多くあった。入試を突破することが最大の目標とされてきた傾向もある。また、英語の授業においても同様のことが言える。英文の訳読や、英文法がどのように機能するかという知識を得る講義型の授業が多く展開されていた。また、頻繁に活用されているペア・グループ活動は、その場限りのものが多く、表面的な意見交換で止まってしまっていた。これからは、英語を通して、さらに先の未来を見据えること、教科書を活用しながら考える授業を展開すること、題材を通して、様々な気づきや発見、自ら問いを創造し解決していくことが求められる。

子どもたちの自ら問う力を育むためには、できる限り多くの授業において、子どもたちが問いを創造するための手立てを工夫し、実践を積み重ねていく必要があると考える。

#### (1) 子どもたちが問いを持つための授業づくりの視点

子どもたちが問いを持つための手立てを考える上で、以下の視点を定め、それらに基づいた授業づくりを行う。

### ①子どもたちの目指す姿が明確な目標や課題の設定

子どもたちの身につけたい力を明らかにする。その力を身につけるために、授業の中でどのような活動や発問を行えばよいか吟味する。また、学習指導要領や学校教育目標に根差した目指す子どもの姿を明確にすることで、指導の見通しを立てる。特に、子どもたちが習得した知識や経験を活かし、コミュニケーションを行う目的や場面、状況等に応じて自分の考えや気持ちなどを適切に表現できるような課題や1人では達成できないようなものでも子どもたち同士が力を合わせて乗り越えられるような課題の設定を目指す。

### ②本質的な問いを引き出す教材研究

目的や場面、状況に応じた適切な問いを子どもたちが持つためには、まず教師自身が教材と向き合う必要がある。教材研究をおろそかにして、ただ問うことを議論してしまうと、子どもたちは方法論として発問を捉え、表面的な思考に留まってしまう可能性がある。子どもたちに考えさせたい事柄や身につけるべき言語材料、気づきは何かを考える。問いを創る上で、この教材研究の視点が非常に重要である。

私たち英語教師は、英語を通じて、子どもたちの心やことばを教育することを目指している。扱う題材には、たくさんの想いやメッセージが込められているため、多種多様なテーマに触れさせたい。込められたメッセージを受け止め、驚きや感動、新しい発見へと導くのである。

### ③子どもたちの活動を支える教師の役割

子どもたちは教師を模範とする。教師が率先して子どもたちと関わりを持つ中で、安心して話せる雰囲気づくりを目指す。子どもたちが学びの主人公になれるよう、心理的な不安を取り除ける工夫を行う。また、子どもたちの発達段階に応じて、見方・考え方を豊かにする必要がある。子どもたち同士、子どもたちの生活世界と教材の世界、社会や世界の状況などを結びつける「架け橋」の役割を担う。

#### (2) 生徒たちの思考を深める言語活動の設計・デザイン

本研究では、教材と現実世界を行き来しながら子どもたちが持っている認識を刺激し、生徒同士の関係形成や生徒の自発的な問いの創造を目指す。そのため、以下の3点を意識した活動を取り入れる。

#### ①継続的に行う活動

子どもたちが自ら問いを創造するためには、長期的に活動を行う必要がある。また、本校で実施しているラウンド制の授業と連携を図りながら、本活動は帯活動として扱い、以下の表の流れを意識しながら実践する。

表1 主な活動の流れの視点

活動	視点
① 題材との出会い	対象の認識・既知の検索
② 自己内対話	沈黙・思考・推論・感情
③ 他者との対話	表現・相互理解
④ ②と③の往還	自分の問いの創造・気づき

### ②扱う題材と生徒たちをつなげる

本校で扱う教科書では、平和、科学技術・福祉、人権問題、環境問題など、多様な題材が取り上げられている。中には明確な答えが出せないものもあるが、まずは生徒たちの身近な場面と照らし合わせることで、当事者意識を持たせる。

また、提示した教材を通して、子どもたちが持っている認識のズレを積極的に活用する。思考したことをお互いに比較や開示することで、新しい認識を得ることが可能となる。得た認識と考えた思考を照らし合わせることで、自己肯定感や批判的思考能力の育成を目指す。

### ③生徒たちの発話の場面の確保

教師が模範となることはもちろん、生徒たちが思考を深め、安心して表現できる場を設定することも重要である。その際、教師のファシリテーターとしての役割が求められる。まずは、生徒一人一人の考えたことを教師が心を開いて受け入れる。「あなたの話をしっかり聴いていますよ」という姿勢を示すことで、その雰囲気が生徒たちに伝わるのである。また、生徒とともに考えることも欠かさない。教師の立ち位置を変えるのである。講義型の授業では、主従の関係性ができてしまい、生徒たちはプレッシャーを感じてしまう。そこで、時には生徒たちと同じ視線で課題を見ながら問いかけるようにする。そうすることで、生徒たちの背中を押してあげるような温かさや心地よさを引き出す。これらの姿勢を教師が率先して示すことにより、生徒同士でも同様なつながりを導いていく。

知識を活用し、答えのない課題に向けて立ち向かえる力の育成のための、教師・生徒一体型の協働的な授業の展開を目指す。また、一時的な実践ではなく、長期的に子どもたちとの信頼関係を築きながら、実践する。子どもたちはこれから激動の社会の中を生きていく。彼らが自己実現に向けてたくましく課題に立ち向かっていけるよう支援したい。

言語はコミュニケーションの手段である。放たれた言葉が弓矢のように心に突き刺さり、傷つけることもある。一方、たった一言の温かみが受け取った人の一生を支えるのみならず、他の人へと伝えられてゆくこともある。様々な考え方や触れ合った彼らが、グローバル社会で活躍し、英語でふれあい、理解しあい、どの国の人々とも平和な対話を築ける素地を作ることを目指す。

## 8. 研究の実践（2年次）

### (1) 年間計画等の作成

新学習指導要領の施行に伴い、子どもたちが使用する教科書も改定された。扱われる題材も新しくなっているため、新たな教材に対する理解を深める必要がある。

#### ①新たな教科書の教材研究

初めに、主な言語材料や各単元の題材や出版社が設定している単元目標について確認を行った(表2)。本市で採択されている *Here We Go!* (光村図書) は、会話文を中心に構成されており、登場人物たちの心情を容易に感じとることができるため、子どもたちに親しみやすい内容となっている。3年生では、科学技術や環境問題等の社会問題も取り

上げられており、教科書の世界を感じるだけでなく、子どもたちの意見交換を行う題材や場面が設けられていた。

表2 主な言語材料、題材等一覧

Unit	タイトル	主な言語材料	題材/単元目標 (光村図書による設定)
Unit1	School Life Around the World	受動態	世界の学校 ・学校紹介の記事から、日本の学校との違いを読み取ることができる。 ・読んだ記事について、意見を発表することができる。
Unit2	Our School Trip	現在完了	修学旅行 ・会話から、おすすめの場所やしたなどを聞き取ることができる。 ・おすすめの場所について、教え合うことができる。
Unit3	Lessons From Hiroshima	現在完了進行形 It is -to-	平和学習 ・文章から、人物の経験や心情などを読み取ることができる。 ・読んだ文章について、感じたことなどを発表することができる。
Unit4	AI Technology and Language	関係代名詞	科学技術 ・投稿文から、それぞれの意見の要点を読み取ることができる。 ・読んだ投稿文について、感想や自分の意見を書くことができる。
Unit5	Plastic Waste	関係代名詞 後置修飾	環境問題 ・プレゼンテーションから、話の流れを読み取ることができる。 ・読んだプレゼンテーションについて、感想や考えを伝え合うことができる。
Unit6	The Chorus Contest	後置修飾 関係疑問文	合唱コンクール ・絵の説明から、場面や状況を読み取ることができる。 ・絵にふさわしいセリフを考えて、発表することができる。
Unit7	Tina's Speech	疑問詞+to+動詞の原形 仮定法 (if...)	思い出のスピーチ ・スピーチから、話し手がいざいざ伝えたいことを聞き取ることができる。 ・今の自分の様子を伝える、スピーチをすることができる。
Unit8	Goodbye, Tina	仮定法 (I wish...)	別れと旅立ち ・手紙から、書き手のいざいざ伝えたいことを読み取ることができる。 ・自分の気持ちを伝える、手紙を書くことができる。

②目指す生徒像の設定

次に、年間を通して、生徒にどのような力を身につけてほしいかという「目指すべき生徒像」として、長期的(年間)・短期的(3ヶ月ごと)な目標を設定した。この1年を通して、子どもたちが能動的に考え、意見を交換し、新たな問いを産み出せるようにと、長期的な「目指すべき生徒像」は、『自らの問いを創造し、仲間とともに解決に立ち向かえる生徒』と設定した。また、短期的な「目指すべき生徒像」については、本市で実践している『ラウンドシステム』と連携させながら設定をした。それぞれの目標や各期間のビジョンについては、以下の表に掲載している。

表3 短期的な目指す生徒像および活動計画

短期>目指す生徒像		自らの既知の認識を刺激し、何事にも興味を持つ習慣や聴く態度を持つ											
月		4				5				6			
3学年	ビジョン	week1	week2	week3	week4	week1	week2	week3	week4	week1	week2	week3	week4
		夏休み	長期学習・全国学習	GW	前期中間	パフォーマンステスト							
		目標の明確化	発動的な発言振ぶり(生徒理解・ペア・グループ活動)										
		動機付け				当たり前の質問のやり取り(pair chat / The Five Whys)							
		Round1 [ピクチャーカード読解] Round2 [本文生ひ替え] Round3 [音読]											
短期>目指す生徒像		自分の考えを理由と共に即興的に述べることができる											
月		7				8				9			
3学年	ビジョン	week1	week2	week3	week4	week1	week2	week3	week4	week1	week2	week3	week4
		夏休み			夏休み	前期中間	パフォーマンステスト						
		目標の明確化											
						即興的に自分の考えを語り、相手に述べられる練習づくり							
		Round3 [音読・穴あき音読] Round4 [ストーリー・リテリング]											
短期>目指す生徒像		相手の意見も受け入れながら、意見交換ができる											
月		10				11				12			
3学年	ビジョン	week1	week2	week3	week4	week1	week2	week3	week4	week1	week2	week3	week4
		夏休み			私立入学	後期中間	私立入学	卒業式	夏休み				
		目標の明確化											
						仲間との意見交換を通して、新たな発見を生み出す							
		Round4 [ストーリー・リテリング] Round5 [混合リテリング 教科書の題材を元に書く読解活動]											
短期>目指す生徒像		自らの問いを創造し、仲間と共に解決に立ち向かえる生徒											
月		1				2				3			
3学年	ビジョン	week1	week2	week3	week4	week1	week2	week3	week4	week1	week2	week3	week4
		夏休み			私立入学	後期中間	私立入学	卒業式	夏休み				
		目標の明確化											
						これからの未来へ視野を広げ 数年後の自分がどうなっているか							
		Round5 [混合リテリング 教科書の題材を元に書く読解活動]											

『ラウンドシステム』の指導は、年間にさまざまな目的を設定している。本文の概要理解、音読活動、自己表現等、視点を変えながら教科書を繰り返す指導方法である。

(2) 帯活動のデザイン

子どもたちが継続的に行えること、扱う題材と子どもたちの知識や経験を結びつけること、子どもたちの発話の場面を確保することを意識しながら、以下の4つの帯活動をデザインした。

① One Minute Monologue

子どもたちの発話量と流暢さに焦点を当てる活動である。即興的に内容を構成し、相手に分かりやすく伝えられるよう「話す」力を高める。また、発話した内容を文字にすることで、「書く」力の育成も目指す。聴き手は、ワードカウンターを使用し、「聴く」力を高めていく。

②クイック Q&A

クイックQ&A ⑧ 過去形(不規則動詞)		Class	No.	Name
<質問文 (Questions)>		<答え方 (Answers)>		
1	Hi, how are you doing? I'm good too.	1	Fine. How are you?	
2	What did you eat for breakfast this morning?	2	I ate <u>natto, egg, rice and miso soup.</u>	
3	What did you eat for dinner last night?	3	I ate <u>curry and rice.</u>	
4	What time did you get up this morning?	4	I got up at <u>6:00 a.m.</u>	
5	What time did you go to bed last night?	5	I went to bed at <u>10:00 p.m.</u>	

図1 クイック Q&A ワークシート

ペアで行う活動である。相手に質問する抵抗をなくすことや英語での質問の仕方を確認すること、あいづちやつなぎ言葉を使用することを目的としている。英問英答(一問一答)形式を基本とする(図1)。扱う表現は、be動詞、三人称単数現在形、wh-疑問詞などさまざまである。

③ 問いストーリー

教科書の本文の内容を、さらに理解するために行う活動である。主に、Closed Questionsを活用し、T or F クイズやWh-疑問文を用いて、本文の内容に対する理解を深めていく。さらに、子ども自身が「なぜ」「どうして」と感じた内容を疑問文にする活動も設定する。

④ Big Question

教師から子どもたちへ「問い」を投げかける。単元のテーマに合ったOpen-Ended Questionsを設定する。答えが一つにならないため、教科書の内容やALTとの対話から子どもたちに自己内対話をさせ、さらに仲間との対話の中で更なる気づきと出会えるよう工夫をする。

(3) 授業実践の経緯

3年生の授業を担当することとなった。彼らが1年生のころに英語を指導していたが、やはり1年間の空白は避けて通れないものであった。特に大きく感じたことは、ペアやグループでの対話を活用した活動についてである。感染症対策のために、ペアやグループでの活動はなるべく控えるよう指示があった。また、彼らが2年生の時にも、感染症対策のために話すことによる意見交換などのペア活動はほとんど行われてこなかった。そのため、指導を開始した4月か

らしばらくの間、感染症対策に気を配りながら、ペア活動に対する抵抗を下げるための活動に尽力した。

#### ①第1期（4月～6月）

<主な授業の構成>

1. Vocal Exercise
2. Counting Numbers
3. クイック Q&A
4. Student Teacher
5. じゃれマガ / Picture Describing
6. One Minute Monologue (自己紹介/My Favorite Food)
7. Round 1 (イラスト) / Round 2 (本文)

この時期に設定した短期目標は、『自らの既知の認識を刺激し、何事にも興味を持つ習慣や聞く態度を持つ』である。

新しいクラスになったことや久しく対話活動ができなかったことから、子どもたちの間に薄らと見えない壁があるように感じた。Counting Numbers やクイック Q&A で、課題達成に向けてペアで協力する態度を養った。また、Picture Describing では、子どもたちがそれぞれ持っている表現力や知識を活用しながら、相手にわかりやすく伝えられるような話す力の素地を整えていった。これらの活動を取り入れたことで、子どもたちの笑顔が多く見られ、次第に温かさが教室に戻ってきた時期でもある。

#### ②第2期（7月～9月）

<主な授業の構成>

1. Counting Numbers
2. クイック Q&A
3. 単語チェックシート
4. 25 words test
5. One Minute Monologue (My Favorite Season etc.)
6. Round 3 (音読)

短期目標は、『自分の考えを理由と共に即興的に述べることができる』である。子どもたちの中で、自分の意見を相手に伝えることに対して、少しずつ抵抗がなくなってきたが、夏休み明けに3週間の分散登校があり、ペアやグループでの活動は極力制限しなければならない状況となった。

この時期から、各教科で子どもたちがタブレットを使用できる環境となった。仲間との意見交換が積極的にできない状況であったため、自分の発話や音読をタブレットに録画し、録画したものを共有しながら自分の考えを深めていった。また、音読活動においても、デジタル教科書に収録されている音声を活用し、自分の発音や聞き取りやすさ等を確認しながら取り組んだ。

#### ③第3期（10月～12月）

<主な授業の構成>

1. クイック Q&A
2. 単語チェックシート
3. 25 words test / 入試対策
4. One Minute Monologue
5. 問いストーリー
6. Round 4 (穴あき音読) / Round 5 (Story Telling)

短期目標は、『相手の意見も受け入れながら、意見交換ができる』である。One Minute Monologue で扱うトピックを、多様な意見が出されるものを設定した。

この時期、朝食を摂らずに登校する生徒が目立っていたため、「My Best Breakfast」と設定した。このトピックでは、主食を何にするかで意見が分かれた。さらに、和食派か洋食派かでも積極的な意見交換が見られた。中には、スイーツを「My Best Breakfast」に設定した生徒も現れ、自分の意見を円滑に伝える環境が教室にできていることが確認された。

さらに、このトピックを発展させ、「ALTの先生におすすめするためにはどうするか」という目的を与えた。ALTの先生に、好みの食材を質問する生徒や母国の有名な料理を調べる生徒、栄養がしっかり摂れる日本食を提案する生徒もいた。自分のことだけではなく、相手のことも考えられる態度が育っていた。

#### ④第4期（1月～3月）

<主な授業の構成>

1. 単語チェックシート
2. 25 words test
3. One Minute Monologue (環境 / 経済 / 平和 etc.)
4. Round 5 (Story Telling again)
5. 入試対策

第4期では、『自らの問いを創造し、仲間と共に解決に立ち向かえる』を短期目標としている。

この時期は、私立・公立入試が控えており、子どもたちの意識も入試に向いてくる。彼らの不安やニーズを保障することはもちろんである。

しかし、子どもたちはこれからの予測困難な社会に飛び立とうとしている。様々な変化に積極的に向き合い、他者と協働して課題を解決していくことや、様々な情報を見極め知識の概念的な理解を実現し情報を再構成するなどして新たな価値につなげていくこと、複雑な状況変化の中で目的を再構築することができるようにすることも重要であると考えている。

短期目標にもある通り、受動的に与えられた課題をこなすのではなく、自ら課題を見つけ、解決に立ち向かえるような授業デザインを続けていく。

### 9. 研究の成果

#### (1) One Minute Monologue

この活動では、提示されたトピックに対して即興的に内容を構成し、相手に分かりやすく伝えることが求められる。自分が持っている知識や考えをどう伝えれば相手に伝わるか、子どもたちは試行錯誤しながらアウトプットをしていた。また、聴き手もただ聞いているだけではなく、ワードカウンターを用いて語数を数えたり、話し手の内容に焦点を当てたり、疑問や興味深く感じたことを質問できるよう集中して聴くように仕向けた。第1期では、なかなか聴き手が質問をすることができなかったが、繰り返し行うことで相手の話す内容に興味を持ちながら聴く生徒が増えていた。

(2) 問いストーリー

3 Think
(1) あなたが、このお話を読んで Why (なぜ)、If (もし〜だったら) と考えたことを、疑問文にして書いてみよう。その解答も推測して書いてみよう。(思考力)
だろうか。
解答:

図2 問いストーリー ワークシートの一部

教科書の内容理解を図る上で活躍した。ラウンドシステムで何度も教科書を繰り返しているが、さらにもう一度読み返す機会となった。この活動で特に重要なのが、Think の活動である(図2)。生徒たちに興味を抱いた箇所や疑問に感じた箇所に注目させる。その後、興味や疑問を Why と If の疑問文形式にし、推測解答も考えさせる。推測解答まで考えることにより、自己内対話を機械的に発生させる意図がある。この活動に取り組む際は、母語を使用している。生徒たちからは、「なぜ、彼らはモスクへ行かなければならないのだろうか」「なぜ大きなプールがあるのだろうか」「もし、彼らが日本語を学んでいたら、日本を好きになるだろうか」といった Think が出された。自分で考えた問いをペアやグループの仲間に向う時間を設けることにより、意見の一致や相違が生まれ、自己内対話で生まれた意見の再構築を促した。実施当初は、調べれば分かるような知識面の問いが多く見られたが、回数を重ねるにつれて、教科書の内容から、自分の立場に置き換えて思考し、表現する傾向が見られた。

(3) Big Question

Here We Go! Course 3	Self-check Sheet
Unit 5	Plastic Waste
[Goal] Tell the key points of the story with pictures and answer the "Big Question" 教科書の絵を使い、意見を加えながら "Big Question" の答えやストーリーを話すことができる。	
[Big Question] What would you suggest to help protect the environment?	
① Big Question	To show the Big Question
② Review	To read the unit in pairs To talk about the Big Question with their partners.

図3 Big Question の構成案

Big Question は、Round 5 の Story Telling と連動して実施した。今までの経験から、ただ教科書の内容を伝えるだけの Story reproduction にならないよう、Unit の核となる問いを設定し子どもたちに問いを投げかけた(図3)。投げかけた問いは、子どもたちの考える視点を多角的に広げてくれた。意見交換が活発に行われるようになり、新しい発見と出会えた生徒もいる。Unit 7 では、登場人物の1人が3年前の自分に語りかける場面がある。その場面を活用し、『自分だったら3年前の自分に何と語りかけるか』と設定した。子どもたちは各々に考えていたが、ある生徒がふと ALT に同じ問いを投げかけていた。会話は教室全体へ広が

り、ALT の先生がどのように日本語と出会ったのかという話題にまで発展した。ALT の話から、普段は考えない日本語の良さを子どもたちは感じる事ができた。

一方で、扱う題材については十分に教材研究を行う必要がある。世界の学校や学校行事については、子どもたちも話しやすい印象であったが、平和学習や環境問題等については、子どもたちの捉え方が世界規模になってしまい、身近な話題や自分ごとになるまで焦点化することに時間がかかってしまった。自由な幅を設けることも大切であるが、こちらの最低限の達成目標を設定しておく必要がある。

(4) 生徒作品より

1. 「なるほど」「使いたい」「なぜ」「もし〜」と思った教科書の文を3つ挙げましょう。							
	圧手箱	誰が	する(です)	だれ	なに	どこ	いつ
①	They go to the mosque on Friday.						
②	The classes are taught in English or Arabic.						
③	Students from across the world introduce their school.						
2. なぜその文を挙げたのか、考えをまとめよう。							
	圧手箱	誰が	する(です)	だれ	なに	どこ	いつ
①	Why do students go to the mosque? A. Because they have to go to there to do worship.						
②	If I chose two languages, I chose English and Japanese. I have two reasons. First, English is used by many people. So, it is useful. Second, I think Japanese pronunciation is interesting.						
③	If I were them, I would introduce a large garden. There are many flowers and trees. They are beautiful.						

図4 Unit 1 生徒A の作品 (表面)

Round 5 の Story Telling を行うにあたり、子どもたちの「なるほど」「なぜ」「もし〜」といった疑問に感じたことや興味深いと思った教科書の本文に焦点を当てるよう促した。図4の生徒Aの記述では、UAE の子どもたちが毎週金曜日にモスクに向かうこと、英語とアラビア語の2言語で学んでいることに注目していることが分かる。また、なぜその文を選んだのか考えをまとめさせた際には、“Why do students go to the mosque?” “Because they have to go to there to do worship.” (原文) というように自分なりの問いと答えを記述している。

Thursday. They go to the mosque on Friday.
By the way, why do students go to the mosque?
I think that's because they have to go to there to do worship. Their classes are taught in English or Arabic. If I chose two languages, I would chose English and Japanese. That's because English is used by many people in the world and Japanese pronunciation is interesting. So English and Japanese is very great.
Third, Kota, Tina, Eri and Hajin is looking at a website. In the website, students from across the world introduce their school. If I were them, I would introduce a large garden in my school. There are many flowers and trees. They are very beautiful.

図5 Unit 1 生徒A の作品の一部 (裏面)

自分の考えをまとめた後、ペアやグループで Story Telling の活動を行なった。自分の思考を言語化し、仲間へ伝え合った。時には、仲間の良い表現を参考にし、自分の表現に加えることもあった。一定数の伝え合いの後、話した内容を文字化した。図5の生徒Aの作品では、表面で考えた自分の意見と、教科書の伝えたい内容を上手に組み合わせられて表現されていることが分かる。

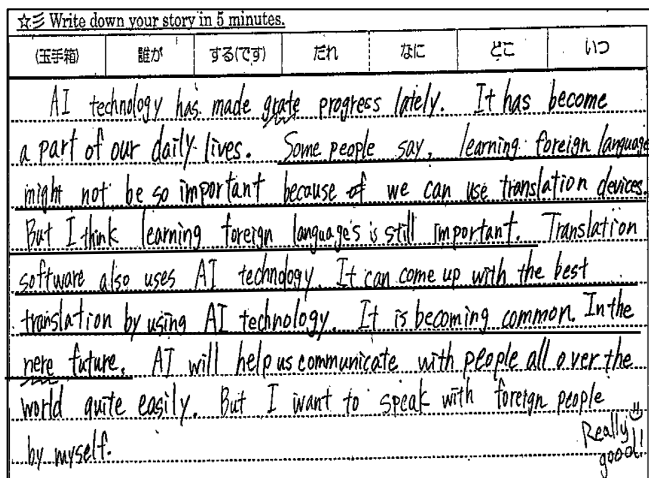


図6 Unit4 生徒Bの作品 ※下線は筆者

生徒Bは、AI technology について記述している(図6)。Unit4では、『Is learning foreign languages important?』を Big Question に設定し、Story Telling を実施した。この記述からは、自分とは異なる意見を取り入れながら表現している。また、AI devices の良さも認めつつも、自分はどうかという明確な意見を持っている。

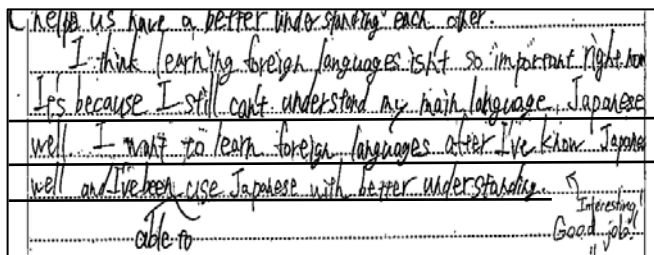


図7 Unit4 生徒Cの作品

Unit4の伝え合いでは、“Learning foreign languages is important.”という意見が多く見られたが、生徒Cは逆の意見を述べている。日本語の大切さに焦点を当てていることが記述から分かる。このように、同じ意見が多数見られた中でも、自分の意見を明確に伝えられる環境があった。

(5) アンケートより

本研究における子どもたちの変容について、12月にアンケート調査を実施した。

『英語の授業のどのようところが好きですか』

- ・友達と協力しながら、英語を学んでいくこと。
- ・普段の授業のように1人で勉強するのではなくペアの子や友達と一緒に勉強ができるから。
- ・グループワークなど自らの意見を言う場面がたくさんあるため。

『英語の授業で、自分の意見や考えを英語でもっと伝える活動を行いたいですか。』

- ・ほかの人の意見を聞くことでどんな単語を使っているかとか単純にどんな風に考えているかがわかるから。
- ・自分に英語力が身に付くし相手の意見を聞いて自分が知らなかった事が分かるから。
- ・不安になる気持ちもあるけれど、その気持ちを捨ててチャレンジした時の達成感が素晴らしいから。

アンケートの記述にも見られる通り、本研究を通して、協働的な言語活動に前向きな姿勢をもった生徒が多く育っていることがわかる。また、教師から様々な視点の問いを投げかけることにより、子どもたちの言語活動が活発になり、教科書の内容よりさらに踏み込んだ「深い学び」へとつながった。

9. 今後の課題・展望

様々な支援をしなければならない状況があった。具体的には Big Question に対してそもそも自分の考えを持つことができない生徒、伝えたいことがあるにも関わらず、それをどう伝えれば良いかの手段(表現方法)に悩んでしまい、結果として苦手意識につながってしまった生徒、ペアやグループを効果的に活用し、支え合いながら取り組むよう仕向けたが、「相手に迷惑をかけたくない」という思いを抱いていた生徒などが見受けられた。基礎的な学力を保障すること、単語レベルや1文でも正解・表現できるという小さな成功体験を積み重ねていくことが求められる。

本研究を通して、子どもたちは教科書の世界と自分たちの現実世界を頻りに往来してきた。自己内対話や他者との対話も積極的に取り組んだ。しかし、英語科のみならず、学校全体での連携の必要性を感じた。自分の意見を持つことや仲間へ伝える経験や達成感を母語で味わうことでより一層深く学ぶことができるだろう。教科の特性にも拠るが、様々な教科において子どもの「探求」が始まる授業づくりを目指すことが重要である。本研究をゴールとするのではなく、子どもたちの可能性を最大限に引き出すためのスタートとして、同僚や子どもたちと共に実現を目指していきたい。

10. 主な引用・参考文献

- ・安斎勇樹, 塩瀬隆之(2020). 『問いのデザイン』学芸出版社
- ・江利川春雄(2012). 『協同学習を取り入れた英語授業のすすめ』大修館書店
- ・胡子美由紀(2020). 『中学英語 生徒が話したくなる! 発問の技術』学陽書房
- ・田中武夫, 田中知聡(2009). 『英語教師のための発問テクニック—英語授業を活性化するリーディング指導』大修館書店
- ・多田孝志(2018). 『対話型授業の理論と実践—深い思考を生起させる12の要件』教育出版株式会社
- ・佐伯胖(2003). 『「学び」を問いつづけて』小学館
- ・古屋和久(2018). 『「学び合う教室文化」をすべての教室に』世織書房
- ・渡邊聡代, 山野有紀, 安納久美子, 須藤美恵子(2019). 「内容言語統合型学習(CLIL)による小中高をつなぐ授業実践—思考を深める発問の工夫—」『宇都宮大学教育学部教育実践紀要 第6号』